

26	新城	新城小学校	スズキ シホ 名前 鈴木 梓 穂
分科会番号	1	分科会名	国語教育 作文その他

【研究題目】

仲間とかかわり合いながら話し合うことのよさを実感し、自己の成長を自覚する子どもの育成
～「みんなで考える問題解決ミーティング 勝利への作戦会議を開こう」の実践を通して～

【研究要項】

1 主題設定の理由

高学年として意欲に満ちた姿で進級してきた本学級の子どもたちは、日常の学校生活の中でも、「高学年だから」「自分たちが手本になりたい」といった前向きな言葉が聞かれる。とくに、1学期の行事である野外活動では、役割を意識しながら意欲的に取り組もうとする姿が見られ、行事により学年が一つになる経験をすることができた。1学期の国語の授業では、自分の考えを伝えようと勇気を出して発言する子どもや、困っている仲間に声をかける姿が見られ、互いにかかわろうとする意識や、前向きに話し合いに取り組もうとする姿勢が育ちつつある。一方で、自分の考えや思いが強く、仲間の考えに共感したり認めたりすることが苦手な子どももいる。また、話し合いが「自分の意見を言う場」ととどまる場面も見られた。

学習指導要領においては、主体的・対話的で深い学びの実現が求められており、話し合い活動は子ども同士が考えを交流し、互いに認め合いながら学びを深める重要な学習活動として位置づけられている。話し合いを通じて多様な考えに触れることで、自分の考えを見つめ直したり新たな視点に気付いたりする経験は、子どもの学びや人間関係の形成において大きな意義をもつ。しかし、話し合い活動を行うこと自体が目的となってしまうと、子どもは「話し合った」という事実だけで満足し、話し合うことのよさや自分自身の変容に気付くことができない。

子どもたちには、話し合いを通して互いの考えをつなげたり認め合ったりする経験を積み重ね、そこで得た気付きや変化を振り返ることで、「仲間と話し合ったから解決できた」「以前よりも自分は成長した」と自己の成長を自覚してほしい。そして、このような経験の積み重ねは、話し合いに対する肯定的な意識を高め、次の学習や生活場面においても主体的に仲間とかかわろうとする姿につながるのではないだろうか。以上のことから、「仲間とかかわり合いながら話し合うことのよさを実感し、自己の成長を自覚する子どもの育成」を本研究の主題として設定した。

2 研究の構想

(1) めざす子どもの姿

- 互いの考えや思いをつなげたり認めたりすることで、仲間とかかわり合いながら話し合うことのよさを実感できる子
- 話し合いを通して得た気付きや変化を振り返りながら、自己の成長を自覚できる子

(2) 研究の仮説

仮説 1

互いの考えをつなげたり認め合ったりする場を意図的に設定することで、話し合うことのよさを実感する(※1)ようになるだろう。

※1 本研究における『話し合うことのよさを実感する』とは、「友達の考えを聞き、認め合いながら話し合う中で、自分一人では気付かなかった考えに出会い、自分の考えや行動の変化を自覚できること」と定義する。

仮説 2

活動後に自分や仲間の変化を振り返る場を継続的に設けることで、話し合いを通じた自己の成長を自覚するようになるだろう。

(3) 具体的な手立て

仮説1に対する手立て

手立て①テーマの設定と出合わせ方の工夫

めざす子どもの姿に近づくためには、まず、子どもたちの「話したい」という意欲が大切だと考える。1学期の学年クラスマッチでは、相手チームに敗れ、悔しい思いを味わった。試合後には「どうして負けてしまったのか」「次は絶対に勝ちたい」といった声が多く聞かれ、勝敗の結果だけでなく、試合の過程を振り返ろうとする姿が見られた。2学期の運動会の種目の一つに赤白対抗帽子取りがある。「勝つためには何を話し合えばよいのだろうか」という必然性のある形でテーマを投げかける。

手立て②話し合い活動を支える環境づくりの設定

対話を支える環境づくりとして、ラウンドスタディを取り入れた話し合い活動を行う。ラウンドスタディとは、少人数のグループを作り、一定の時間ごとにメンバーを入れ替えながら意見交流を行う方法である。一人ひとりが仲間とかかわりながら、自分の考えを伝えたり、相手の考えを聞いたりする。ラウンドスタディを取り入れることで、子ども同士が考えを交流し合う話し合いへと転換する。そして、全ての子どもが発言の機会が保障され、自分の考えを伝えることができるようにしていく。さらに、仲間の意見を最後まで聞く場面を意図的に設定することで、多様な考えに触れながら自分の考えを見直したり、深めたりできるようにする。

手立て③付箋を使った「視点」の見える化

付箋を画用紙の上に配置し、同じ意見だと判断したものは近くに、異なる意見だと判断したものは距離をあけて置くように声をかける。付箋を並べ替える操作を通して、考えの共通点や相違点を可視化し、話し合いの際に参照できる資料として活用する。子どもたちは、付箋を使って話し合うことで視覚的にも分かりやすくなるだろうと考えた。その際、仲間の考えをただ聞くだけでなく、「どこが同じか」「どこが違うのか」を意識させるようにする。また、自分の考えにこだわりをもちながらも、仲間の考えを認め合いながら話し合う気持ちをもてるようにする。考えを認める発言が見られた時には、教師がその場で賞賛の言葉をかけたり、話し合いの途中で全体に紹介したりすることで、仲間の考えを受け止める姿のよさを価値づける。

仮説2に対する手立て

手立て④視点を明確にした振り返り

話し合い活動後の振り返りにおいて、視点を明確にした振り返りを行う。具体的には、「成長・・・(仲間)のおかげで～」「つなぐ・・・次はもっと～」「比べる、深める・・・前は～、今は～」という三つの視点を提示し、子どもが自分の学びや変化を意識して振り返ることができるようにする。

また、子どもが視点を意識して書いた記述には、教師がよさを認めたり個別に声をかけて詳しく話を聞いたりする。さらに、自分自身の振り返りに加え、仲間のよさや学級全体の変化にも目を向けることができるようにする。具体的には、話し合いの中で見られた仲間とのかかわり方や発言のよさを取り上げて共有したり、学級としての話し合いの雰囲気や進め方がどのように変化してきたのかを振り返ったりする時間を設ける。

手立て⑤振り返りを仲間と共有する場の設定

手立て④の振り返りを蓄積した『成長ノート』を作成する。本研究における『成長ノート』とは、「話し合い活動を通して得た気づきを継続的に記録し、過去の自分と現在の自分を比べながら、仲間との話し合いを通して自己の成長を実感するための振り返りノート」と定義する。これにより自分自身の変化に気付くことができ、話し合いを重ねる中での成長を実感しやすくなるだろうと考えた。個人の振り返りに加えて、仲間のよさや学級全体の変化にも目を向ける時間を設ける。互いのかかわり合いのよさを言葉にして共有することで、話し合いの価値を個人の成長としてだけでなく、集団としての成長として捉えられるようにする。ここでは、『成長ノート』をもとに仲間と振り返りを共有する場を設定し、互いのよさや変容を認め合う活動を取り入れる。こうした継続的な振り返りの蓄積と共有を通して、話し合いの価値を実感し、自己の成長を前向きに捉えることができるようにする。

(4) 抽出見について

年度当初にAと話す中で、「話し合いは好きだよ」と答える場面があり、話し合い活動そのものに対して肯定的な意識をもっていることがうかがえた。しかし、実際の話し合い活動におけるAの姿を見ると、自分の意見を積極的に発言する一方で、仲間の意見を聞いて考えを広げたり深めたりする場面はほとんど見られなかった。自分の考えや思いが強いため、仲間の考えに共感したり認めたりすることが難しく、話し合いの終わりまで自分の考えを押し通そうとする様子が多く見られた。そのため、自分の考えが仲間に認められなかった場合には、話し合いの中での手応えを感じられず、話し合うことのよさに気付けないまま活動が終わってしまうことがあった。

国語科ではAに、伝え合い、分かり合う喜びを実感してほしい。そして、仲間の考えや思いを聞くことで学びが広がり深まったと感じる学習を積み重ねることで、国語科の楽しさを更に実感させたい。この学習を通して、Aが自分と違う考えや思いを認めながら、話し合いの中で仲間と協力して話し合うことのよさを自覚できるようにしてほしい。

3 研究の実践と考察

(1) テーマの設定と出合わせ方の工夫[手立て①]

2学期、学年クラスマッチの計画で、どのような種目を行いたい意見を集めたところ、「帽子取りをしたい」という声が多く挙がった。本校では2学期の大きな行事の一つとして運動会がある。コロナが流行し、全校で行う運動会が4年間でできなかった。その中で6年生の思いから復活した帽子取り。子どもたちも大いに盛り上がり、休み時間に練習したり6年生を中心に作戦を立てたりするなど思い出に残る競技である。クラスマッチ当日、相手チームに敗れ、悔しい思いをした子どもたちが見られた。その中でも勝負ごとに対する思いが強いAは試合後、涙目になりながら「負けたのが悔しい」と語った。A以外の子どもたちからも「もっと声をかけ合えばよかった」など、チームとしての課題に気付く発言も聞かれた。それを聞いたAは、担任のところへ来て思いを伝えた。「ぼくたちの…(略)…足りなかったと思う」という言葉からは、活動が上手くいかなかった原因を個人の力ではなく、仲間との話し合いや協力の在り方に求め始めている姿が伺える【資料1】。

このやりとりをしたタイミングで、国語科単元『話し合って問題を解決しよう』に入った。「どんな問題を解決したいかな」と投げかけたところ、Aは「雪組にまけた理由をみんなで考えたい」と記述した【資料2】。また、「運動会のぼうしとりもぜったいに勝ちたい」という強い思いを述べた。A以外にも、24人中20人が帽子取りのテーマで問題を解決していきたいと記述した。

導入では、事前に行った自分たちの話し合いの様子を振り返る場を設定した。実際の話合いの様子を映像で撮影した動画を見ながら、今自分たちができている部分と足りない部分を出し合って共有した。足りない部分は「同じ人が意見を言っていることが多い」「意見がばらばらになっていて一つにまとまっていない」「話していくうちに話がずれてしまっている」などの意見が出された。Aは「話す声が小さい人もいて、全体に聞こえない時がある」「聞いている人の反応がないから、少し不安になる時がある」と問題点を挙げた。その上で、どうすればこれまでよりもレベルアップした話し合いになるのかという視点を全体で共有した。そして、よりよい話し合いを目指すための合言葉として、『話し合いマスターへの道』と題した取り組みをAが提案した。『話し合いマスターへの道』を教室内に掲示し、めあてや大切にしたいポイントをいつでも視覚的に確認できるようにした。Aは、話し合いの途中や休み時間にも掲示物に目を向け【資料3】、自分一人では気付けなかった話し合いの問題点に気付く一歩となった。

(2) 話し合い活動を支える環境づくりの設定[手立て②]

本実践で用いたラウンドスタディとは、発言の順番をあらかじめ決め、一人ずつ順に自分の考えを述べていく話し合いの形式である。仲間が発言している時は途中で口を挟まず、最後まで聞くことを確認するとともに、全ての子どもが発言できるようにした。また、特定の児童に発言が偏らないようにしたり、仲間の考えを落ち着いて聞いて受け止めたりすることを大切にするようにした【資料4】。

10月15日のラウンドスタディでは『ぼうしとりで雪組に勝つためには、どんな守りの作戦を立てればよいか』というテーマで話し合った。Aは、はじめは自分の考えを伝える一方で、仲間の意見を聞く場面では話し手に注目して黙って聞いていた。話し合いの途中、Aが同じグループの仲間の意見を聞き、「そういう意見もあるのか」と小さくつぶやく場面が見られた。

【資料5】「そういう意見も」という言葉からは、自分の考えはもちつつ一人では気付けなかった視点に気づき、認めたことが伺われる。そのタイミングで教師が「今の言葉とてもいいね。友達のことを認めて聞いているね」と声をかけ、仲間の考えを受け止めようとする姿を価値づけた。Aはその後仲間意見に耳を傾けながら話し合いに参加する様子が見られた。最後まで話を聞くことを確認したことで、Aは自分の考えを一方向的に主張する姿が減少した。

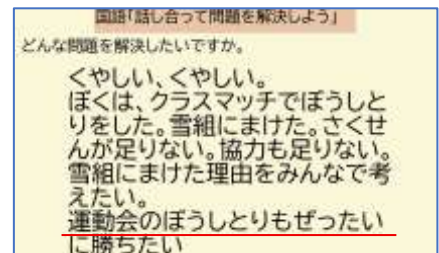
T: どうしたの?

A: 雪組に負けて悔しかった。

T: そうだね。悔しかったね。どうして負けたのかな。

A: ぼくたちの作戦会議が足りなかった。みんな勝手に動いていたから協力が足りなかったと思う。

【資料1 クラスマッチ後に教室で話したAとの記録】



【資料2 オクリンクに記述したAの思い】



【資料3 休み時間、掲示に目を向けるA】



【資料4 ラウンドスタディで話し合うA】

T: 守りの作戦について話します。

A: 強い人が固まって3～4人のグループを作ればいいと思います。

【Aの様子 メモ】

自信をもってはっきりと発言する。自分の考えが最もいいという表情が見られる。

B: でも強い人が固まると、他のところが弱くなると思う。

C: 守る場所を決めて、役割を分けた方がいいんじゃないかな。

(中略)

【Aの様子 メモ】

仲間の発言中、口を挟まずに聞いているが、考え込む様子が見られる。

A: (・・・そういう意見もあるのか。)

T: 今のAの言葉、とてもいいね。友達のことを認めているね。

【Aの様子】

教師の声かけを受け、少しうなずきながら再び仲間の方を見る。

【資料5 10月15日授業記録ラウンドスタディの記録】

(3) 付箋を使った「視点」の見える化【手立て③】

10月15日に守りの作戦を話し合った後、体育の授業でその作戦を実践し、Aは手応えを感じていた。しかし、2回目の試合では、相手チームに敗れた。すると、Aは、「守りだけじゃ勝てないよ」と話した。この言葉から、次の作戦へと目を向けるようになっていくことが伺える【資料6】。

B：守りはうまくいったけど、相手のぼうしを全然とれなかったよね。
A：ぼくたちの作戦を見て、雪組も作戦を研究してきたに違いない。前と同じじゃだめだったのかもー。
T：今の話、いいところに目が向いているね。じゃあ次は何を考えたらよさそう？
A：どうやって相手のぼうしを取りに行くか。守りだけじゃ勝てないよ。
B：次の話し合いで攻めの作戦も考えよう。
A：先生、次の授業、国語にするのはだめ？

【資料6 2回目の試合後の会話】

1学期のラウンドスタディによる話し合い活動では、主にペンを使って自分や仲間の意見を書き留めながら話し合いを進めていた。しかし、その方法では、意見を記録することに意識が向きやすく、仲間の考えと自分の考えを比べながら話し合いを深めるまでには至らない場面も見られた。Aも自分が話したことを書き留めることに精いっぱい、いらいらすることがあった。2学期からは、意見の「同じ点」「異なる点」に着目できるよう付箋を用い、仲間の考えと自分の考えを視覚的に整理しながら話し合う活動を取り入れた。また、前時までに自分の考えを付箋に

A：一人が相手を引きつけている間に、別の人が帽子を取るのはどう？
C：それは前に守りの作戦でも出た。役割を分ける作戦と似ているよ。
B：(付箋を貼りながら)引きつけ役と取る役に分かれるっていうところは同じだね。
D：みんなで一気に攻めたほうが、相手が混乱すると思う。
A：D君の考えはよくとちがう。(付箋を離す)
C：どっちの方が相手の帽子を取りやすいか、想像して考えてみない？(30秒グループ内で考える)
D：A君の考えもありだと思う。もし、相手が守りを固めていたら一気に行くと、相手の人数を見て攻め方を変えとか？
A：(Dの付箋を見ながら)あー、初めは、役割を分けた方がいいと思っていたけど、D君が言ったみたいに、相手の様子を見て一気にいくのもいいかも！
B：どっちも相手を止めるってところは同じ考えだね。
A：たしかに。(自分の付箋とDの付箋を近づける)

【資料7 10月17日授業記録ラウンドスタディの記録】

書くことで、話すことに集中できるようにした。10月17日には「攻めの作戦」について話し合った【資料7】。冒頭、Aが「一人が…(略)…帽子を取るのはどう？」と発言した。「どう？」という言葉からは、自分の考えを一方向的に主張するのではなく、相手の考えを聞き、受け止めようとする姿勢が伺える。自分の思いが強いAが、仲間の考えを認めながら話し合いをつなげていこうとする意識へと変化してきたことが分かる。一方でDが「みんなで一気に…(略)…混乱すると思う」と言うと、Aは「D君の考えはよくと違う」と話して付箋を離した。その後、Dは「A君の考えも…(略)…とか？」とAの考えを認めながら提案した。するとAは「D君が言ったみたいに…(略)…いいかも」と相手の考えを認める発言が見られた。そしてBが「どっちも…(略)…同じ考えだね」と言うと、Aは「たしかに」と言って2つの付箋を近づけて貼った【資料8】。



【資料8 付箋を使って比べるA】

これまで自分の考えを主張しがちであったAだが、付箋を介して意見を比べることで、仲間の考えや思いをつなげたり認めたりする姿が見られるようになってきた。会話の中で見られた「そういう考えもありだと思う」「同じだね」といった発言は、相手の意見を否定するのではなく、一度認めた上で自分の考えと比べながら仲間とかかわろうとする姿だと考える。

(4) 視点を明確にした振り返り【手立て④】

話し合い活動後の振り返りにおいて、単なる感想に終わらないよう、あらかじめ振り返りの視点を示した。具体的には三つの視点を示し、振り返りを記述するように声をかけた【資料9】。子どもの記述内容を確認しながら、教師が「どの場面ですら思ったのか」「誰の考えがきっかけになったのか」と問い返しを行い、振り返りがより具体になるよう支援した。

10月16日の授業後、Aの振り返りには『みんなのおかげで』という言葉が書かれていた【資料10】。教師が「どの場面ですら思ったのか？」と聞くと、Aは「ぼくは強い人が固まればいいと思っていたけど、B君とC君が、ぼくが思っていなかったことを言った場面だよ」と答えた【資料5】。これは①の視点【資料9】につながる振り返りだと読み取れる。10月17日のAの振り返りには『もっともっとみんなの意見にいろんな言葉でリアクションしたい』と書かれていた【資料11】。教師が「いろんな言葉って例えば？」と聞くとAは「ぼくは、なるほど～って言うことが多いんだけど、友達が、今の考え、いいねとかナイス！とか新しい発見！とかいろんな言葉を使っていたからぼくもまねしたい」と言った。これは②の視点【資料9】につながる振り返りだと読み取れる。さらに10月20日のAの振り返りには『あいてのことを考えていけんをつたえることができました』と書かれてい

① 成長

〇〇のおかげで、なるほどと思った
～がわかった・できた
～に気付いた

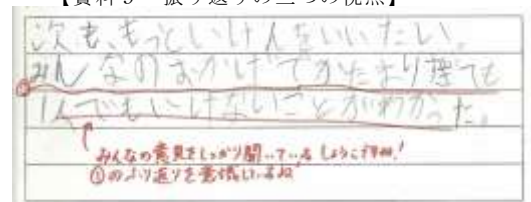
② つなぐ

次は～
もっと～したい
もしかしたら～かも

③ 比べる・深める

～と比べて
前は～だったけれど、今は～になった

【資料9 振り返りの三つの視点】



【資料10 視点①につながるAの振り返り】

と書かれていた【資料11】。教師が「いろんな言葉って例えば？」と聞くとAは「ぼくは、なるほど～って言うことが多いんだけど、友達が、今の考え、いいねとかナイス！とか新しい発見！とかいろんな言葉を使っていたからぼくもまねしたい」と言った。これは②の視点【資料9】につながる振り返りだと読み取れる。さらに10月20日のAの振り返りには『あいてのことを考えていけんをつたえることができました』と書かれてい

た【資料12】。教師が『前はどうかだったの?』と聞くと、Aは「自分が言いたいことを言っていた気がする」と答えた。これは③の視点【資料9】につながる振り返りだと読み取れた。

1学期は仲間の考えのよさに触れることが少なかったAが、次第に他者の行動を振り返りに取り入れるようになっていった。また、このように振り返りの視点を示したことで、Aは「何を振り返ればよいのか」が明確になり、仲間の考えを聞いて考えが変わった場面や、相手の意見を認めることができた場面など、話し合いの中での具体的な出来事を振り返る記述が増えた。さらに、視点を意識できた振り返りに教師が朱書きをしたり、個別に会話をしたりする支援をした。当初は自分の考えを主張した場面を中心に振り返っていたが、次第に自分の考えや行動の変化に気付き始めた。

自分自身の振り返りに加え、仲間のよさや学級全体の変化にも目を向けることができるよう、「話し合いの中でいいなと思った友達の考えや行動はある?」や「クラス全体の話し合いはどのように変わってきた?」と問いかけをした。これらの問いを振り返りカードに書き、個人で振り返った後、紹介する時間を設けたり掲示したりした。休み時間に掲示を見ていたAに「みんなの振り返りを見てどう思う?」と声をかけた。するとAは「みんながぼくの考えをほめてくれてうれしかった。前よりもみんなが優しい気持ちで話し合いをするようになったな〜」という言葉が返ってきた。

こうしたやり取りを通して、児童同士が互いのよさを認め合う雰囲気が学級全体に広がっていったことを感じた瞬間だった。

(5) 振り返りを仲間と共有する場の設定【手立て⑤】

手立て④のように、振り返りの視点を明確にすることで、自分の考えや行動の変化を自覚する子どもが増えていった。さらに、成長を実感として定着させるために、振り返りを蓄積していく手立てとして、『成長ノート』を活用することにした。『成長・つなぐ・比べる』の三つの視点を継続して用い、毎回同じ視点で振り返ることができるようにした。

成長ノートを使い始めた10月6日のAの振り返りには、自分のことを『おこちゃま』【資料13】と記し、自分自身を否定的に捉えた。しかし、話し合い活動を重ね、成長ノートに記録を蓄積していく中で、次第にAの記述に変化が見られるようになった。単元の終盤に近付いた10月21日のAの振り返りには『友達のいけんをきくのはだいじだな』【資料14】と記し、仲間の考えに目を向けた振り返りが増えていった。単元の最後、Aは『さいしょは…(略)…きづきました』【資料15】と記述した。この記述から、Aが話し合いの経験を振り返りながら、過去の自分と現在の自分を比べ、自己の成長を自覚している様子が見られた。また、成長ノートに記した振り返りを、仲間と共有する場を設定した。グループをつくり、自分の成長ノートの中から『変わったところ』『がんばったところ』を紹介した。

また、『よいと思ったところ』『すごいと思った変化』を一つ以上相手に伝えることを約束として示し、互いのよさや変容を認め合った。Aのグループでは、はじめにAが話し始めた【資料16】。「前はさ…(略)…言うようにしてる」や「ちょっとは成長できたかな」というAの言葉からは、自分の考えや行動の変化を他者の評価を通して振り返っている様子が伺える。

授業が終わった後、教師がAのところへ向かい「友達の言葉からも、自分の変化に気付けたね。今のAは話し合いマスターに近づいていると思うよ」と価値づけた。自己の変化を自覚し、自分自身の成長として捉えることができた。

授業が終わった後、教師がAのところへ向かい「友達の言葉からも、自分の変化に気付けたね。今のAは話し合いマスターに近づいていると思うよ」と価値づけた。自己の変化を自覚し、自分自身の成長として捉えることができた。

4 研究の成果

(1) 仮説①について

手立て①テーマの設定と出合わせ方の工夫について

学年クラスマッチという実体験を話し合いの題材として取り上げた。帽子取りにおいて勝敗を経験した直後に話し合いを設定することで、子どもたちは「なぜ負けたのか」「次はどうすればよいのか」という課題意識を自然にもつようになった。『話し合いマスターへの

【資料11 視点②につながるAの振り返り】

【資料12 視点③につながるAの振り返り】

【資料13 Aの10月6日の振り返り】

【資料14 Aの10月21日の振り返り】

【資料15 Aの単元最後の振り返り】

(略)

B: A君は前よりちゃんと聞くようになったと思う。
A: 前はさ、自分の考えの方がいいって思ってた、すぐ言っちゃってんだけど、最近では友達の話をちゃんと聞いてから言うようにしてる。

【Aの様子 メモ】

少し照れた様子

C: 前は「それはちがう」とか「でも」ってすぐ言ってたけど、今は「あー、なるほど」って言ってるよ。

A: ちょっとは成長できたかな。

【資料16 成長を仲間と共有するA】

道』を掲示し、目標を可視化したことで、子どもたちは話し合いに向かう際のめあてを意識しながら参加するようになった。これらのことから、話し合いのテーマを子どもの実体験と結び付け、その意義を明確にしたことで、話し合いへの意欲が高まった。そして、めざす子どもの姿に向かうための土台づくりができた。

手立て②話し合い活動を支える環境づくりの設定について

ラウンドスタディによって、発言の機会が均等に確保されるとともに、「同じ考え」「少し違う考え」「新しい視点」に繰り返し出会う場が生まれた。子どもたちは、仲間の考えを聞き合いながら思考を深めていく姿を見せるようになった。Aは、自分の考えを強く主張する傾向があり、話し合いの中で仲間の考えを受け止めることが難しかった。しかし、ラウンドスタディを実践したことにより、自然と「聞く」「受け止める」時間が確保された。その中で、Aは仲間の考えに対して「そういう意見もあるのか」とつぶやく場面が見られた。これは、自分一人では気付くことができなかった考えに出会うことができたと言える。また、教師がその姿を即時に価値づけることで、Aは仲間の考えに対してさらに目を向けるようになった。さらに、学級全体としても、話し合いの中で相手の発言を受け止める言葉が増えていった。対話を支える環境を整えたことで、互いの考えを認め合いながら話し合うことができるようになった。

手立て③付箋を使った「視点」の見える化について

付箋を使った話し合いをすることにより、「どの意見が似ているのか」「どこが少し違うのか」という視点を示しながら意見交流を行うことができた。子どもたちは仲間の考えを聞き取り、自分の考えと照らし合わせながら話を聞こうとする姿を見せるようになった。Aは、付箋を移動しながら話し合いに参加する姿が見られた。また、学級全体としても、「どこが似ている?」「ちがうのはここかな」といった言葉が自然に使われるようになり、仲間の考えを否定するのではなく『比べる』ことで理解しようとする姿勢が生まれた。このように『同じ点』『異なる点』という視点を明確にしたことで、話し合いは、考えを出し合う活動から、互いの考えを比べながら深める活動に変化した。とくにAは、付箋を介して意見を比べることで、仲間の考えや思いをつなげたり認めたりする姿が見られるようになった。会話の中で見られた「そういう考えもありだと思う」「同じだね」といった発言から、相手の意見を否定するのではなく、一度認めた上で自分の考えと比べながら仲間とかかわろうとする姿が見られた。

(2) 仮説②について

手立て④視点を明確にした振り返りについて

三つの視点を示すことで、振り返りの際に着目すべき点が明確になり、漠然とした感想が減った。Aの振り返りの様子から、自身の変化を具体的に表現する姿が見られた【資料13・14・15】。また、個人の振り返りに加え、仲間のよさや学級全体の変化にも目を向ける活動を取り入れた。その結果、Aは「みんながぼくの考えをほめてくれてうれしかった。前よりもみんなが優しい気持ちで話し合いをするようになったな〜」と話した。こうしたやり取りを通して、児童同士が互いのよさを認め合う雰囲気が学級全体に広がっていったことを感じた瞬間だった。子どもたちが自分の考えや行動の変化を自覚するとともに、話し合いのよさが一人一人の成長だけでなく、学級全体の変容としても実感されるようになった。

手立て⑤振り返りを仲間と共有する場の設定について

成長ノートを活用することで、子どもたちは「その時にどう思ったか」だけでなく、「前の自分と比べてどう変わったのか」「これからどうしていきたいのか」を振り返ることができた。Aは成長ノートへの記述の初期段階では「ぼくは、まだまだおこちゃまです」【資料13】と自分を否定的に捉えていたが、話し合い活動と振り返りを重ねる中で、変化が見られるようになった。さらに単元の最後に行った成長を振り返る記述では、自分の変容を過去と現在を比べながら表現していた【資料15】。成長ノートに継続して記述することで、自分の変化を振り返り、認める経験を積むことができたと考えられる。また、成長ノートをもとに、仲間と振り返りを共有する場面を設定したことで、互いのよさや変容を認め合う姿も見られた【資料16】。このようなやり取りを通して、Aは自己の変化を自覚し、自分自身の成長として捉えることができた。

5 今後の課題

本実践では、教師が話し合いの視点や進め方、振り返りの工夫などを意図的に設定することで、話し合いがスムーズに進んだ。また、子どもたちは、仲間の考えを認めながら話し合うことのよさを実感することができた。今後は、こうした話し合いの経験を一過性のものに終わらせず、子ども一人一人が場面に応じて自ら話し合いのよさを生かそうとする力を高めていくことができるようにしていきたい。また、国語で学んだことを他教科にも生かしていけるような単元構想を考えていきたい。

6 おわりに

運動会当日、帽子取りでは大差をつけて勝利し、全員で喜びを分かち合った。Aは3学期、「みんなの意見をちゃんと聞ける級長になりたい」と話した。Aが本実践で得た学びを、学習場面にととめず、学級での役割や人とのかかわり方へと広げていることを感じる。今後も、子どもたちが仲間を通して自分の成長に気づき、次の一歩を踏み出していけるよう、最後まで見守っていきたい。